

ロゲイニングの世界選手権に向けて、1/3 アスリートモード。ナビゲーションからリスク管理、アクティブに過ごした秋は、これからのヒントが満載だった。

■石川さんとの邂逅

10月4日

斑尾のトレランレースへ。この世界の牽引車の一人、石川弘樹さんがプロデュースする人気大会だ。しっとりとした自然林の中の緩やかなトレイルが彼のメッセージを明確にしてくれる。彼とはいつか話をしたいと思っていたが、期せずしてゴール後、向こうから声をかけてきた。このレース、エイドでは、係員が「村越さん！」とネームで応援してくれるのだ。「俺ってけっこう有名な？」一瞬そう思ったが、実は彼らは余裕のある時にはナンバービブをみて、名前を調べているらしいのだ。昔ジョージ・シーハンの「ランニング人間学」にボストンマラソンでは沿道の人が新聞に載るスタートリストから好きな名前を選んで、その名前を呼び続けて応援するのだと読んだことがあった。そんなところにも石川さんのプロデュースが浸透している。

レースはトレーニングしていない割には走れたと思う程度の成績だったが、疲労からの回復にほぼ一週間かかった。



10月8日

低下していた気分は夕方ジョグで復活した。ところが、今度は後首に軽い痛みが出始めた。その痛みは翌朝には首が回らないほどひどくなった。

翌9日は京都での学会だった。その後久保さんのお宅に泊めてもらい、10日は東山のトレイルを走ると付加価値をつけたつもりだったが、とても走れそうにない。泣く泣く帰宅。せめて



ロゲイニングの世界選手権を控え、チームメイトの田島利佳と安倍川東稜の大縦走。遙かに伸びる稜線の向こうには自分の住む街がある。このコースを踏破することが、静岡市民の憧れになる日が来た時、日本のアウトドアスポーツは大きく変わる

もの慰めに、京都駅の観光案内所で京都一周のトレイルマップをゲット。いつかは挑戦してみたい、阿闍梨の84kmコース。

10月17日

来春の全日本の地図調査に入る。10-11月は他のイベントも目白押しだが、気持ちよい季節にできるだけ入っておきたい。おまけに今回は、国土交通省の富士砂防から提供されたレーザー測量と、そこからアジア航測が作成した赤色立体図のデータがある。測量上のストレスが全くないはずなのだ。わくわくした気分で調査に入ることなんて、高校生の時に調査した東野以来かも。調査は楽しく進むが、終日眠く、思わず昼過ぎに10分ほど横になる。

10月23日

読図とナビゲーションの公開講座を大学で宮内と実施する。申し込みは定員を超える28人と大人気。中には下田からやってきた人もいる。「山ガール」ブームで、ここ1年ほどは、若い男女の参加も多い。前にも30歳代の参加はあったが、かつての彼らは明らかにエキスパートだった。最近の20-30歳代は、明らかに初心者っぽい。こういう層にアウトドアの基礎を伝えるこ

とも、アウトドアスポーツをやってきたものの務めだと感じる。

最後はオリエンテーリング形式で、技術の復習。持っていたデジカメで移動中の様子を撮る。ビデオによる振り返りはスポーツでは当たり前だが、登山やナビゲーションの世界ではスキル習得の基本的な枠組みすら確立されていないのだ。こんなことにもオリエンテーリング40年間の蓄積が生かせる。



10月26日

伊東の高校の出前授業をした後、東京へ。JOAの山西会長とともに、学連の学生幹部と今後の協力関係についてミーティングを持つ。改めてお互いの組織のことを何も理解していないことを自覚させられる。

■日蓮宗は地形萌えの元祖

11月2日

身延山→安倍峠→竜爪山→浅間神社の安倍川東稜大縦走(+α)に出かけた。NZのロゲイニング世界選手権でチームを組む田島利佳と、夜間走行+24時間行動の予行演習でもある。特に安倍峠から先は一級河川安倍川の源流から市街地中心部まで、安倍川と富士川の分水嶺を一直線に結ぶルートで、工事中の第二東名を除くと一度も林道を含む車道を横切ることなく下れる。

11月2日の夜19:30、下部温泉駅に集合した。駅前に止まるタクシーに七面山の登山口まで頼んだら、運転手さんも山をやる人らしく、「今からですか？」って顔をされた。「遭難しないでくださいね。こっちは責任感じちゃうから。」そういえば、5年くらい前に、伊豆でタクシーで登山口まで送られた女性が遭難する事件があったな。20:00、予定時間約20時間の縦走へ出発！

七面山山頂まではコースタイムの約半分の2時間半で登頂。七面山は日蓮宗の総本山身延山の西方にあり、日蓮大聖人の高弟日朗上人と南部実長公によって開かれた。1900mの山頂になぜと思うような平地と微地形が広がり、地形萌え垂涎の地形だ。そこに僧坊と本堂が建てられている。阿闍梨はトレランの元祖とすれば、日蓮宗は地形萌えの元祖かも。

翌日は秋晴れの中を、時に富士山を眺めながら、時にしっとりした森の中のトレイルを楽しみながら、軽く登っては緩やかに下る尾根線を走る。すっかり陽も暮れた17時過ぎに第二東名まで到達。その後市街地まで約8kmだが、時間と脚への負担を考え、ここで終了にした。実働21時間。前半はずっと歩きとは言え、結構いける。ロゲイニングの世界選手権に向けての不安材料が一つ解消した。

11月6日

羽鳥、中村、ロブなどの世界選手権調査組に加えて、福井の三上君を加えて、全日本に向けて地図調査合宿。今日は、僕が先日調査した同じエリアを皆で調査して比較という趣向だ。互いの調査成果を比較すると、自分一人ですら悩んだ岩やがけの表現も、意外と一致している。さすが精鋭揃い。

11月8日

体育の授業でレスキュー競争をやった。オリエンティアが救急法を受講することが最近では随分一般的になってきたが、アウトドアでは救急するだけでなく、けが人を救急車がきてくれる場所まで運ばなければならない。たっ

た一人や二人でどうやって運べるの、人数が多かったらどんな運び方ができるの？実はそこにアウトドアのセルフレスキューの盲点がある。搬送法こそアウトドアの救急法の画竜点睛である。

それを楽しく学んでもらうために、搬送法を教えた後、チームで競争することにした。意識のほとんどない人を一人で運ぶ時の方法であるファイアーマンズキャリー(手を相手の股に入れてそのまま肩に担ぎ上げる)をやったら、期せずして、「格好いい！」の声。医龍の一シーンにあったのだそうだ。

このファイアーマンズキャリー、本来は意識のない人が人を一人で運ぶという想定だから、横たわっている相手を担ぎあげるのは難しいはずだ。どうすればいいの？と問いかけた後、実演して見せた。こちらは拍手喝采で、事故現場のヒーロー気分。その後の競争もえらく盛り上がった。

■自己責任

11月17日

午前中の授業を終えて、成田に向かった。オークランドで乗り換えて、クライストチャーチへ。そこからレンタカーを借りて、短いながらニュージーランドの旅が始まる。りかちゃんの希望でまずは地図専門店である「マップワールド」、そしてアウトドア用品のアウトレットへ。

11月20日

土曜日の12時、ロゲイニングの世界選手権がスタートする。スタート3時間前の9時には地図が配布される。南北約16km、東西14kmの範囲にチェックポイントが93個。すべて回ると140kmくらいになるとか・・・。詳しくは「ロゲイニング世界選手権報告」を。

結果はミックス年齢制限なしで13位。3位とは600点くらいの差がある。これは日本のチームでは最高得点の柳下・山田組より200点も高い得点だ。「ああしたらよかった。こうしたらどうだろう」というアイデアはいくらでも浮かぶが、移動スピードが24時間でどの程度低下するか見当もつかなかったから、それは「たれば」にすぎない。

でも、次のレースではもう少し賢くプランを立てられるだろう。現状ではとても届くとは思えない点数だが、2年間準備をすれば不可能なレベルでもないだろう。「1回出ればいいや」と思っていたロゲイニングの世界選手権だが、2年後のチェコが、少しだけ視野に入ってきた。

ロゲイニングの後は、南部の山岳エリアで、ちょっとだけアウトドア気分。遊歩道の入り口に近隣の案内板が立っている。遊歩道やハイキング道が紹介されているが、わかりやすいピクトグラムで、簡単に歩ける道から、山岳ルートまでの区分が示されている。簡単に歩ける道は、乳母車を押した親のピクトグラムだ。その後歩いたアースアール近くの遊歩道には、途中「ここから先山岳ルート。十分な経験と装備が必要。地図読みとルートファインディングは必須である」という立て看板が立っていた。

アウトドアでは、「自己責任」という枕詞がよく使われる。しかしいくらなんでも幼稚園児に自己責任とは言わないだろう。初心者はいわばその世界での幼稚園児である。危険があるのかわいのか、その危険はどんなものかを教えない限り、自己責任なんて成立しない。この遊歩道は、ここまでは安全が確保された場所、ここから先はそうでない場所(山岳ルート)だから、この先に進めるのは経験と知識を持って自己責任が何かをわかる人だけが進めるという明確なメッセージを出している。アウトドアイベントを行う時にも参考にできる考え方だ。

11月24日

学校での事故は年間100万件を超える。その多くは休憩時間や部活で発生し、中には後遺症の残るものも少なくない。安全についての講演依頼が、ここ2年ばかり増えた。

もともとは講演だけの依頼だった。「学校でもっとも生きる力の育成が遅れているのが安全教育と部活動」を日頃から感じるこのごろ、教えるだけではなく、自分で考えてほしい。そういう教育をしてこそ、成人しての「自己責任」を持てるはずだ。班で学校を回って危ないと思う場所を見つけて地図化するという授業を講演の前に行うことを逆提案した。

フィールドワークの様子はちょっと心許なかったが、教室の前に張った地図に、発見した場所を危ない内容ごとに分けてシールで張ってみると、「ぶつかると」「転ぶ」ではきれいに発生場所に特徴が現れた。昨今、地理情報をデータ処理をすることで、法則性を発見したり、新たな出店の立地を検討する地理情報システム(GIS)が活用されているが、こんなふうにしてやれば、コンピュータも高いソフトも必要ない。地図の力を思い知った授業だった。



地図に危ない場所のシールを貼る生徒たち。地図の力を思い知る。

■至福の時間

11月26日

朝霧ロゲイニングの週末。いい地図データを手に入れたのがあだになって、金曜日の午前中になってようやくコースデータが上がってきた。仕方ない、地図印刷は野外活動センターに行っからにしよう。うちからもプリンターを持ち出し、2台体制でやれば、徹夜にはならないだろう。試しに一枚刷ってみると、転送時間を除けば1枚1分ほど。これなら300枚を1台3時間づつあれば十分なはず。

印刷が終わった深夜、軽くビールを飲みながらコーディネーターの太田君や村越チルドレンの「末娘」杉山さんと、今後のイベントのことをおしゃべりする至福の時間。ロゲイニングの世界選手権の話をする、「いいですね。24時間ロゲイニング。やりましょう」ということになった。昨年の朝霧高原トレイルランニングも、こうして決まったのだ。太田君は翌日には所長決裁をとっていた。

11月27日

寝不足か、ぼっとしながらフラッグつけ。午後はナビゲーション講習会。毎年夜には簡単な講習を行っているが、実技も含めた本格的な講習を初めて取り入れてみた。4-5名も集まれば上出来だと思っていたが、締め切ってみれば15名もの参加があった。この日も若い女性二人組の、いかにも初心者っぽい参加があった。

彼らは屋内講習を終えて外の実技に出る時、ブーツを履いていた。注意を促すと、今度はぼつちりした靴とウェアに替えてきた。話を聞くと、最近アドベンチャーレースを始めたが前回読めなかったのが、悔しいから勉強したい、このロゲイニングは昨年も友人が参加して楽しかったのでまた参加したい、ということだった。

彼らには彼らの参加動機があるので、必ずしも競技的なオリエンテーリングを始めてほしいとは思わない。しかし、彼らとトップ選手が同じ大会で走り、トップ選手のナビゲーションを見る

機会があれば、彼らはオリエンテーリングへの良き理解者になるに違いない。昨今の参加者層を見ると、そんな思いも、あながち妄想とは思えない。

11月28日

2年ぶりにきってもらったアドベンチャーレーサーの佐藤佳幸（よっちゃん）さんは、今年も楽しいゲームを用意してミニアドベンチャーレースを盛り上げてくれた。佐藤さんも、このスタッフの働きをすっかり気に入ってくれた様子。今や仕事仲間ともなったよっちゃんとそんな会話がができるのも、至福のひとつときだ。

翌日の朝霧ロゲイニングでは、天候もよく、いつものように楽しいイベントであった。



：抜群のファシリティーからアウトドアの中に。スタート直後に地図を読むロゲイニング参加者

12月2日

JR 大人の休日倶楽部の講習の後、JOA に出向いて某研修会社との打ち合わせを行う。オリエンテーリングをベースにしながら、企業教育への直接的な教訓になるような研修を行いたいという。向こうが提示してきたコンセプトは06年にJR 東日本の研修に提供した研修教材そのものであった。

ナビゲーションの考え方は、そのまま日常生活や仕事にも活用できる。そういう切り口でオリエンテーリングの蓄積を社会に還元できる。それを実感できる機会を与えてもらった。

■復活の日

12月5日

「県内の公認大会なんか、滅多に出れないでしょ。出てくださいよ」、と湖西の藤田さんに言われていた中日東海に出場。レース 4.2km33分。走りは重いし、途中胸は痛くなるわで自重したが、1位。「今日は勝つもりでしたんですけどね」と和久田に言われる。こうして僅差で勝って悔しがらせるのも年寄

りの仕事だ。小田原の全日本の失格で失って以来の久しぶりのエリート権を獲得。

12月9日

JR 大人の休日倶楽部の最終回の実技講習を青梅で実施。30人を越える受講者にきちんとスキルを伝えるのは不可能に近い作業だが、今回も4名の屈強のアシスタントのおかげで、実りある講習ができた。

最終回の実技が終わると、アンケートを採る。いつも好意的な評価をもらうのだが、自分自身は常に疑問に思う。人に何かを教えることができるのだろうか。その時教師はどんな役割を果たすべきなのだろう。教える機会を広げれば広げるほど、その疑問は膨らみ、それが次へのモチベーションになる。

12月17日

富士山一周トレイルランニングの件で、富士宮の地元の自然保護活動家の人と面談。どんなことを言われるか戦々恐々として臨んだ面談だったが、時には笑い声も出るほどに打ち解け、一定の理解は示してくれた。最初は「森をとぶなんてもつての他」と言っていたその人も、富士山南麓のほとんどは林道であることを告げた途端に、態度が柔らかくなった。トレイルランニングのイメージは一部の批判的な新聞記事などで作り上げられているのかもしれないし、ランナーや主催者たちが正しい姿を伝えることを怠ってきた結果なのかもしれない。この面談に臨むにあたって、静岡県森林行政では一目置かれている地元在住の元東大農学部教授に連絡をとったら、「(行政などにきちんと打診した上で) 正々堂々とやれ！」と発破をかけられた。そんな努力がまだまだ足りない。

12月19日

日沢で選考会。このところ圧倒的に練習量が少ない。昨日も時間的に無理をして、ジムにいったトレッドミルで、疲労をためないように傾斜をつけながら、心肺を追い込む。

その調整がよかったのか、ここ5年間記憶がないほど気持ちよく走れ、技術のきれもよかった。ロゲイニング以降、ほとんどランニングができず、自転車をこいでいたのもよかったのかもしれない。復活？思わずそんな言葉が脳裏をよぎる。

視力が衰えて地図が読めないのには閉口した。暗い森の中では絶望的に見えない。まだまだ早く走れるということだ。

(村越 真)